

どれみなのはなし

そのきゅう



もくじ

まえがき

ぬくぬくめがね	3
たこやきいくつ？	18
あとがき	35

はじめまして、もしくは、おひさしぶりです。

早いもので、かすかに秋風の吹く季節。終了からそんなに経ったなんて、ちよつと驚きです。

さて、ヘタレと言われながらもどれみ本を作り続けて3年近く。染み付いてしまった書き方がもう取れません。いま元のジャンルに戻されたらと思うと、思わず苦笑いしてしまいます。

というわけで、あいかわらずでございます。恥ずかしい啻が苦手な方は、このまま本を閉じて下さいね。準備はよろしいですか？

それでは『どれみはなし』そのきゅう。しばらくの間お付き合いくださいませ。

イラストレーション……久遠一海

酒処 金井亭亭主 猫好敬白

たごやきいくつ？

ほな、また。

妹尾あいこ

瀬川おんぷさま

二週間ぶりやな。元氣やった？

出して4日目かあ　ふう。

まだ6月に入ってへんちゅうのに、大阪はもう暑つて大変や。こないだも学校でな

夏にはバイトでもして、お金ため

学校終わつた帰り道。校門出たところで、勝手にため息でもうた。学校やとクラブ勧誘の先輩に追っかけられてんから、考えてる暇もあらへんけど、ひとりになるとやっぱあかな。

て東京行こ思つてたけど、学校が禁止や言つて、でけへんねん。小学校よりきびしいちゅうのは、どないなってるんやろな？

いまの学校には慣れたんやけど　5月の連休に

こづかいためて、なんとか行けるようにするわ。冬になるかもしれへんけど、待つてな。

会いに行けへんかつたんが痛いなあ。まあ、どれみちゃんたちが新幹線のきつぷ送ろうとしてくれたん、断つてもうたのはあたしやけどな

ん？ あ。あかん。ガラスの前でまたぼーっとしてもうたわ。中のぞくふりして、と ああ、ここケータイ屋やったんか。

せやなあ。手紙やのつて、ケータイやったらすぐなんやけどなあ。まあかけるお金ないし、あつてもおんぶちゃん忙しいから、なかなかかけられへんやろけどな。

なんやいろいろ書いてあんで。メール機能充実か。へえ。 あ、店のおっちゃんこつち見てるわ。さっさと帰ろ。

そついえばどれみちゃんたちとはメールで話してるとか、まえ手紙に書いてあつたなあ。メールやったら学校からできるし、アメリカのももちゃんにかて気楽に書けるかも

いんや、あかんわ。どれみちゃん、学校からおんぶちゃんにメールしたん見つかつて、えらいさわぎになつた、つちゆう話や。こつちでそないなつ

たらシャレならへん。 はあ。

ため息ついて頭上げて、目の前にあつたんは家の郵便受けやつた。 またや。おんぶちゃんに手紙出したら毎日毎日、気いつくくと郵便受けの前に、ぼくつと突つ立つてんねん。ええかげん、自分でもあほや思つけど

開けた郵便受けのぞきこんだら、あ、あつた!! 茶色の封筒の裏に マーク、おんぶちゃんの手紙や♡ せやけど これ、えらい薄いなあ。中身は、と。

前略 妹尾あいこさま

泊まりに行くわね。

かしこ

瀬川おんぶ

なんや、これは??

「ただいまあ」

手紙をかばんにしまいながら玄関開けたら、包丁の音がしてる。あ、そや。今日はおかあちゃん休みやったな。

おじいちゃんの部屋でただいま、言うてから奥行くと　ああ、台所立ってるおかあちゃんやあ。

「ん？　ああ、おかえり。なんや、そないな顔して」
あ。あかんわ。顔ゆるんでしもたのが自分でわかってまう。ちよいとしめて、と。

「あと、あたしやるから。せつかくの休みやんか。おかあちゃんは、居間で座つとつてや」

かばん置いて、腕まくりしてるあたしの頭に、おかあちゃんの指が、つんつ、て当たった。

「こあら。おかあちゃんを台所から追い出すやなんて、10年早いぞ。

煮付けのしたく終わつたら、何か焼いて　」

粉とるんでしゃがんだおかあちゃんの向こうに、煮物のなべがふたつ見えた　うん。

「ああ。それやつたらええよ。自分でタコ焼くさかい。粉と焼き器、借りてくんなあ」

「あ、ちよつと、あいこ？」

たこ焼き器と材料持つて、自分の部屋入つて。

かばん隅っこに置いたら焼き器に電気入れて、油ひいて、どんぶりで粉といて、具う入れて。

焼き器あつたまるん待ちながら、ひよい、と天井見上げたら　ああ、広いなあ。なんや、日に日に広おなつてるような気がするわあ。

もっかい油ひいて、タネ流してたら、さっきの台所が頭に浮かんできた。コンロの上、いまはなんでもふたつや。あたしらのと、おじいちゃんのと。

おやつくらい、自分で作らな、な。

じゅーわじゅーわ焼けたんを、くるくる丸めて、と。

よし、ほいじゃひとつ。はむ うくん。あかんな
粉もタコも悪いわけない、うちゅうことは、あた
しの腕が落ちてるんやろなあ。

あ、そういえば、もう時間やった。

残りのたこ焼きを皿にとって、焼き器の電気切っ
てから、あたしはバタバタ居間に行った。おかあちゃ
んがなんや言ってるなあ、あとであやまる。

居間の座椅子に、おじいちゃんが座ってる。この
時間はいつもそうや。あたしはその横に座布団ひい
て座った。目の前で、おんぶちゃんがしゃべってる。
4月からこの時間、ニユースのコーナー担当して
るんや。けど、きょうは見るの遅かったみたいやな。
ニユース読み終わってしもてるわ。

『 そういえば、遠近学園ちかきんがくえんの創立記念日がありま
すね。おんぶちゃん、お休みはとれたの？ 』
『 ええ。久しぶりの連休だから、泊まりがけて旅行

もいかな、って思ってます 』

ああ、そつか。休みできるから、こつち来るいう
んか。せやけど、記念日やったら日にちもわかっ
てるんやから、ちゃんと書いたらええんに

ま、ええわ。有名な学校やから、そんならい調べ
たらわかるやろ。

『 そうですか。創立記念日は金曜日でしたね。それ
じゃあと一日、しつかり頑張って 』

んな!?

「来るん、あしたかいっ!!」

くつくつくつて、ええ音聞こえてきたわ。あとは、
このまま昆布がやわらかくなるまで見てればええ。
それにしても。

「あいこ、最近ひとりやなあ」

あ。あかん、ついひとり言になってしまったわ。

でもなあ。東京で見たときは、あない友達に囲まれてたいうんに、いまはいつつもひとりやものなあ。

「あゝ、おかあちゃん?」

ひやつ?! ああ、びっくりした。この時間はテレビの時間やから、台所来るなんて思てなかつたわ。

あかんあかん。不思議そうな顔で、あだし見てるやない。

「な、なんでもないで。ちょっと驚いただけ。で、なんや、あいこ」

あら? 珍しいなあ。手えもじもじしてるわ。

「明日な、友だち来るいうてるんやけど　泊めたつて、ええ?」

まあ。心配することなかつたみたいやね。

「ん、明日やったらおとつちゃん遅番やし、うるさないやるな。けど、誰やの?」

「えゝ　おんぶちゃんやねん」

ふうん。そっか。

「わかつた。ええよ」

さあて、お客さんのふとんで、どこ仕舞つてもうたかなあ。つて、そない考えてたら、

「せやけど、おかあちゃん」

ん? また手えもじもじして、なんや心配そうにあたしの目え覗き込んでるわ。どないしたんやろ?

「あんま　その　ふつうでええから。な」

ふふ。そっか。そないな心配あつたんやな。

「うちに来るんは、あいこの友達やろ? 普段なにしてたつて同じやないの。」

あいこの友達、それだけであかんの?」

笑たらあかん、思ても、勝手に口元ほころんでまうなあ。ああ、あいこ下向いてもうて。ぽそぽそつと「おおきに」言つたかと思たら、ぱたぱた、いう音といっしょに部屋駆けてつてもた。

なんも心配することあらへん。あいこの友達なら、あたしの娘も同じなんやから。

ふああ。ちよい眠いなあ。

ったく。こういうときに限って、数学の授業が難
しなってるんやからなあ。食塩水なんて、好かんわ。
まあせやけど、夜じゅうかかって、なんとか部屋
も片したし。おかあちゃんがふとんも出してくれた
し。あとは う〜ん。

「 ったく、困ったもんやなあ。」

学校終わって、校舎出て、門までたどりついて、そ
んで これからどないしたらええんや？

「どこで待ってるとか、ひと言書いとつたら迎えに
行つたるんに。」

せめて新幹線の時間とか、ちよつとでもわかつとつ
たら ああ、そつかあ。バレたらファンに囲まれ
てしまふんやつたわ。そらしゃあない。しゃあない
のはわかるんやけど

「だいたいや。あたしの家知らんくせに、どないし

て来るつもりや、ちゆうねんー！」

「家は知らないけど、学校なら地図に載ってるから
ん？ なんか背中から声が聞こえてきたで。

「クラブ入ってない、って書いてあったものね。帰
る時間は全国共通。でしょ？」

ちよい待ちや、この声 ！？」

「おん む、むぐぐぐっ！！」

くち押さえてる手の先、振り返って見てみたら、
「とりあえず、外で名前呼ぶのは、なし。ね♡」

ブラウスに薄い上着はあったパンツ姿の女の子が、
むぎわら帽子のつばをちよい、っと上げて、ペろっ
て舌出してん。ああ、やっぱり。おんぶちゃんや！

あたしの口から手はずして、一歩後ろに下がっ
た思ったら、じーっとあたし見つめてん。

「うん。制服、さまになつてきたじゃない？」

な、なんや、恥ずかしなあ。

「ふふふ。照れなくてもいいじゃない。さ、じゃあ

まず、あいちゃん家行こつか」

ああ、この言い方も懐かしなあ。引つ越して2ヶ月しか経つてへんのに、もう10年も会ってないみたいや。

あたしは帽子のつば下げたおんぶちゃんの手えにぎつて、帰りの道歩きはじめた。

「お、妹尾が帰りに二人連れやて？めずらしなあ」
学校前の通りから商店街に入るちよい前。なんや聞いた声が、背中から聞こえてきたわ。

振り向いて見てみたら、ああ、同じクラスの田辺と咲ちゃんやないか。

「あいちゃん、その子は？」

あたしより頭ひとつ低い、小さな咲ちゃんが訊いてきてん。丸めがねの中から、不思議そうな目がじーつと。その先ちらつと見てみたら、おんぶちゃん帽

子深くかぶつて、顔かくしてもうてる。

ふう。よかつた。ふたりともおんぶちゃんの大ファンなんや。バレたらえらいこつちや。

「あ、あゝ あははは。え、と。そ、そつ。友だちや。東京の友だち！」

「関東モンかあ？」

やぼつたくネクタイずらしたカマキリみたいな田辺が言つてる。ちいと、カチンとくる言い方やけど、今はがまんや。

「ま、まあそつや。一番仲良おしてもらつた友だちでな。せつかく訪ねて来てくれたんやから、つちゆうて、大阪案内してるんや」

「あの その帽子？」

咲ちゃんが指さした先には、ますます深くかぶつてもうた、おんぶちゃんの帽子。んゝ、そやなあ。

「お日さん そう！この子肌弱くてなあ、こないな強いお日さんやと、帽子とるわけいかへんのや。堪忍なあ」

「へ。さっすが関東モンの嬢ちゃんや。どこもこもデリケートで役たんわ」

うー、こん憎まれ口！ いつもやったらシバいたるとこやけど、おんぷちゃんがいるんや。がまん、がまん

ガコンツツ!!

あたたたた。ごっつい痛そうな音しながら、田辺が地面にぶつ倒れてもった。その上には両手の指組んだ咲ちゃん。恐怖の両手ハンマー炸裂や。

「田辺ツツ!!」

「なんや、おどれ」

立ち上がっても、田辺まだ頭かかえてん。普段ははづきちゃんよりおとなしい咲ちゃんなんやけどなあ、キれると熊でもぼてくりかえしかねへんわ。

「なんや、やない！ 手えついで謝らんかいツツ!!」

「んあ?」

「わあっとなるんか、アホウ！ あんたいま、あいちゃ

んが一番の友だち、バカにしたんやで？ そんなん、あたしが絶対許さへん!!」

あたしは、一瞬ぼかーんとしてしもた。けど、田辺がくるつとこつち向いて、あたしとおんぷちゃん見比べて

いいっ!? 田辺のやつ、おんぷちゃんの前で正座して、地面に頭すりつけてるやん!?

「すまん！ たしかに、今のは俺が悪かったわ。妹尾の友だちやつたら、どない変でも訳あるに決まっぐがっ!」

ああ、咲ちゃんが今度は土下座してる田辺の腹、サツカー蹴りや。もう、見てる方が痛なってくるわ。

「変だけ余計や、ボケー!」

キレたときの咲ちゃんには、あたしもかなんわあ。

せやけど、戻るのも早いんや。この子は。ああ、ほら。こつち振り返つたら、もうリスみたいな顔で苦笑いしてるやん。

「ごめんなあ、このアホ変なこと言うて。あたしは

芹沢咲子。ボケたことぬかしたんは田辺。あいちゃん、大阪での友だちや。よろしゅうな」

おんぶちゃんが、ちよつと黙ってる。そっか、声でバシてまうし。しゃあない、あたしが　て、思たら、おんぶちゃんその場にしゃがみこんでしもた。

田辺立たせて、ひざのほこりはらって　ほかーん、としての二人の手を自分の手と重ねてから、左手で帽子のつばを上げ　え!?

「あいちゃんの東京での友だちで、瀬川おんぶです。よろしくね♡」

あははは　ふたりとも、くちと目えぱか〜んとあけてもうたわ。おんぶちゃんはにこにこのん気に笑てるし。

つて、ちよい待ちや?!

「お、おんぶちゃん、ええんか!?!」

「あいちゃんの友だちなんでしょ? だったら、ちゃんとあいさつしなくちゃ♡」

ああ、もう! あたしは、どないフオローしたら

「ええと、あの、これな　」

咲ちゃんが田辺見上げて、シャツ引つ張ってる。田辺はうんうん、てうなずいてから、

「ああ、ええて。もうなんも言わんでええわ。俺らが会ったんは妹尾の友だちや。名前なんて知らへん。

ほら、さつさと行き!」

シャツにつかまった咲ちゃんも、笑いながらしっしっ、って手で追い払ってる　あたしは、なんや目えが熱うなってしもた。

「ふたりともおおきに! ほな、また来週な」

咲ちゃん田辺によじ登って、その上で大つきく手え振ってん。おんぶちゃんも帽子下げながらやけど、やつぱ手え振って返してる。

あたしは下向きながら、おんぶちゃんの手え引つ張ってた。あかん。しばらく顔上げられへんわ。

なんであたしの友だち、みんなええ子なんやろ

ふふふふ

咲ちゃんたちと別れて、ようやくと顔上げて歩つてると、おんぶちゃんが急に笑い出した。なんやろ思て見てみたら、

「なんか、いい感じじゃない？」

ちよんちよん、て背中の中を指さしてん。見てもなんもあらへんけど ああ、あのふたりかいな。

「せやな。矢田くんとはづきちゃんみたいなものや」

「幼なじみなの？」

ん？ ああ、はづきちゃんはそうやったな。

あたしは笑いながら、手え横に振った。

「あんだだけベタベタしとつても、だれも突つ込みもせえへんねん。あゝいうんを『お似合い』言つんちやうかなあ」

ちよつと空見上げてそう言うたら、おんぶちゃんがあたしの前に回りこんで、のぞき込んできた。

「あいちゃんも、誰かそうなりたいひと、いる？」

ぶつ！ あかん。思わず吹き出してしもたやんか。

「まさか。そんなん、考えたこともないわ。

おんぶちゃんこそ、いろんなひとと会ってるやん。

正直に言うたりー。レポーターもおれへんでー」

ああ。くすくす笑うだけで終わらせてもた。さすがアイドルやな。

「でも、なんか意外」

ん？ なにがや？

「さつき、あいちゃんが二人連れで帰るなんて珍しい、って言われてたじゃない。いつも、ひとり？」

ああ。そないな目でじいっと見られると、いっこち悪うて

「帰りの方向いっしょの子あ、おれへんだけやて。

それより、せつかく大阪来たんやし、ちよい

寄ってこか？ 本場のたこ焼き、食わしたるわ」

早口でなんとかそう言うて、あたしは目線はずし

た。商店街見回して、どこのがええかなあ

て、あ

れ？なんや、いきなりおんぶちゃん立ち止まってもうた。

「どないしたん？」

足止めて、顔のぞきこんでみたら、おんぶちゃんあわてて首振ってん。

「ううん。でも、たこ焼きならあいちゃんが作ってくれると思ってたから」

ああ、そが。

「それがなあ、最近腕が落ちてもうたみたいでな。作ったの自分で食べても、おいしくないんや」

頭かいて笑ってみたけど、おんぶちゃんはごまかせへんな。ほそつ、て言うたん、聞こえてしもた。

「ふうん　でも、そのたこ焼きやさんも、きつとおいしくないと思っけどな」

「ただいまあ」

玄関開けて、あいちゃんが大きな声で言った。

わたしも続けて「おじゃまします」って言ったけど、かき消されちゃったかもしれないわ。

大阪の家はあいちゃんのおじいさんの家。いなかの家みたいだな、って思いながら、あいちゃんについて行ったら、一番手前の部屋に誰か見えた。あ、前に会ったことあるわ。あいちゃんのおじいさんね。

「おお、帰ったんか　ん？　そっちん子は？」

わたしの目を見て、おじいさんがそう言った。あいちゃんと一緒に近くまで行って、背中しゃんとして。

「あいちゃんの友だちの、瀬川おんぶです。おじゃまします」

「おお、そが。あいこの友達か。よあ　よあ来てくれた」

なんだか、涙くんじゃってるわ。ひきつった顔で。どうしたのかしら？

「おじいちゃん、なにも泣くことあれへんやん。

ああ、ちよつと待つてや。いまタオル持つてくるわ」
あいちゃんがばたばたつて、台所歩いてつた。わたしも行くつとしたりけど、手になにか触れてお
じいさん？

「嬢ちゃん。あいこ、堪忍なあ」

え!?

「わしがこんなやのつて、シャキシャキ動けたら、あの子も色あんなことでけるんやけどなあ

こつち来てから、友達と遊びにもよあ行つてへん
みたいや。すまんけど、堪忍したつてな」

そつか。そう、だつたんだ。ひとりで帰るつて、友だちを家に上げられないから

わたしは、おじいさんの手を両手でにぎつた。

うん。この手のあつたかさ。おじいさんの思
いは、あいちゃんと同じだわ。

「大丈夫です。わたしたちは わたしは、わかつてますから」

おじいさん、目をつぶつて笑つた。さつきはひきつたようにしか見えなかつたけど、いまはわかるわ。一所懸命、笑つてるの。

そう、わかつてる。こんなことくらいで、あいちゃんひとりになんて、あたしがさせないわ。

あいちゃんが、絞つた濡れタオル持つてくるまで、わたしはあつたかい手、にぎつてた。

「ここがあいちゃんの部屋なのね？」

あたしの部屋のドアんとこから、おんぶちゃんがじいつと中見渡してん。 な、なんや恥ずかしなあ。

なんもない部屋やし、ひとりやと広い思つてたけど、ふたり入るとせまいわ。あたしは、おかあちゃんの出してくれたふとんの上の座布団ふたつ、ぼんぼん、て置いた。部屋のすみに荷物置いたおんぶちゃんが座つてから、

「いま、なんか持ってきたから」「て台所行こ
 思てたら、おんぶちゃんが手え振つて止めたつた。
 「飲み物なら、まだ冷たいのがあるわ。それより、
 座つて」

かばんの中から、ジューズの缶ふたつ出してん。ま、
 そういうことならええか。

あたしも座つて、ジューズ受け取つたら、

「ほんとはね、どれみちゃんたちも来たがつてたのよ」
 あたしの目え、じつと見ながら、おんぶちゃんが
 言った。

「あいちゃん、わたしたちが買おうとした新幹線の
 きつぷ、断つたじゃない？ それで、どれみちゃん
 すごく心配しちゃつてね」

ああ。言われるとは思たけど、いきなりかあ。

「でも、わたしがひとりで聞いてくる、つて言つて
 きたの。あいちゃんのことだから、きつと」あたし
 のために、お金使つて欲しくない』つて考えてるん
 じゃないかと思つて」

ふう。来たんがおんぶちゃんて助かつたわ。

「せや。どれみちゃんには怒鳴つてしもつて、悪い
 ことした思つけど」

「うそつき」

え、なんやて？

「うそつき、つて言つたのよ。聞こえなかつた？」

え、あ、なんで ！？

「もう。それだけじゃないでしょ？」

友だちと遊びにも行かないし、家にも呼ばない、な
 んて。どれみちゃんがこんなこと知つたら、大変よ。
 毎日大阪行かつて言い出しかねないわ」

あたしの顔、冷たなつてくんがわかる。あかん。ほ
 んまにやりかねんわ。ああ、なんや、からだ震えき
 てもうて

「なんてこと報告されなくなかつたら、なにがあつ
 てもちゃんと遊んで。いい？」

うひゃ!? 目の前におんぶちゃん的笑顔がせまつて
 きてん。 ああ、でも目えがマジヤ。

せやった。あたしには、心配してくれる友だちおるんや。心配、分けてもええ友だちおるんや。つたわ

あたしは、おんぶちゃんにデコちよっとくつつけてから、大きく息すった。うん。おんぶちゃんのそばなら、前の自分に戻れる気がするわ。

「んなこと言つて。おんぶちゃん、ひとりで会いたかったんやないんか？」

ほら、軽口も出てきよるやん。けど、

「そつよ」

あたしはその場で手えついてもた。一枚上手や。

「あいちゃんだって、わたしひとりに会いたかったでしょ？」

うあ。よおシラフでそないなと言えな。よあし。

「そりやまあ、旅行荷物もった子お何人も泊められるほど、うちは広ないしな」

「あ、そんなこと言つたの？ だったら えい♡」

うあは!?

「お、おんぶちゃん!？」

い、いきなり脇つついて、何すんね

「えいえい♡」

くはっ!?

「おん やめんか、つて ひあっ!？」

「素直になるまで、続けちゃうからな」

あたしの脇を左から右からつんつん、てつついて、

ああ、もう！

「こん の、性悪!!」

「当たり前よ。アイドルだもん

で？ 素直になる？ それとも、まだ」

あ、あかん。限界や。

「あーッ！ もつ、降参や。あたしはおんぶちゃんに会いたかった。おんぶちゃん一人に、ず〜っと会いたうてしょうがなかった！ これで、ええんかい!!」

「うん。 おまたせ♡」

おんぶちゃんが抱きついて来たん、受け止めた。

ああ、やつぱかなんなあ、て思いながら。

「ただいまあ」っていう声が、玄関の方から聞こえてきた。あいちゃんのママ、帰ってきたみたい。

「ばたばたって音がしたと思ったら、ドアがカチャッと開いて、」

「おんぶちゃん、いらっしやい。あいこ、テレビ見ひんの?」

わたしは急いであいさつしたけど、ちょこっとなづいただけ。ふふ。ほんと、あいちゃんのママらしいわ。

「え、と。あ、今日はええわ」

「あいちゃんなんだか慌てるみたい。あいちゃんのママが、それ見てくすくす笑ってる。」

「そやね。今日は生で見てるんやもんね」

「おかあちゃん!」

あ、全身で抗議してる。生って、なに?

「おんぶちゃん。あいこ、毎週この時間になると、

いつつもテレビに張り付いて離れへんのよ」

「え?はあ」

今の時間って ああ、そつか。大阪じゃ、あの二ユース番組いまやってるんだっけ。

「いつもテレビのおんぶちゃん見ながら、ぶつぶつ言ってるのよ。あ、疲れとんな」とか

ああ、そういつことかあ。わたしが思わずにっこりしちゃったら、あいちゃん立ち上がって、

「おかあちゃん。もう、あっち行ったって!」

「はいはい。あいこ、目の前でぶつぶつ言ったらかんよ。『ええなあ』なんて」

あいちゃんが足元のまくらつかんだときには、もうドア閉まつた。

あいちゃん、まくら持ったままちよつと固まつたけど、そのまますん、って座り込んだじゃった。

あゝあ。耳まで真っ赤になってるわ♡

「ねえ、あいちゃん。きのうはテレビ、見てたんでしょ?わたし、どう見えた?」

「なーんや、疲れてるうちゅう感じやったなあ」
まだまくら抱えて、ぼそぼそ、って感じで話して
る。わたしはまくら引きはがしてから、近づいて訊
いてみた。

「どのくらい？」

「んー 八ナちゃんひと抱き、ちゅうとこかなあ」
ふふ。さすが、よく見てるわね。それじゃ、こん
どはわたしの番、かな？

「そうね。だから、さっきあいちゃん抱いて、ちよっ
と元気あまっちゃった。少し分けてあげるわ。

ちよっと待っててね」

言いながら立ち上がって、部屋を出た。台所は、来
る途中にあつたはずだから

おんぷちゃんが部屋出て行って、かなりなんなあ
て、時計見たら10分も経ってへん。

あかんあかん。こんなんやったら、おんぷちゃん
中毒になつてまうやんか。氣い落ち着けて、と。

「あいちゃん、ちよっと開けて」

目えつむつとつたら、ドアの外からおんぷちゃん
の声が聞こえてきた。開けて、て。いったい何持っ
てきたんや？

「はい、これ」

開けたとたんに目の前出てきたんは、たこ焼き器
とボールに入ったタネやった。なんや、言ってくれ
れば持つてきたんに。

「さ、おいしくないたこ焼き、作ってみて♡」

いや、言うたんはあたしやけどな。そない笑
いながら言われると、凹んでまっつなあ。

まあええわ。たこ焼き器に電氣いれて、油ひいて、
熱うなるまでタネ混ぜといて、と

を、もう焼きあがつてきたな。ほいじゃ、く
るくる、とまるめて、皿にひよひよい、と。

よし。できたわ。って、いきなりおんぶちゃんの
手えが伸びてきて、皿もってってしもた??

そんな食べたかったんかあて思てたら、目の前に
いま焼いたたこ焼き出てきた。

「あ〜ん」

な、なにやっとなねや?

「あ〜ん」

目の前、たこ焼きがゆらゆらしとん。ああ、なん
やえらい恥ずかしなあ。

「あ〜ん」

はあ。もう、ええわ。あむっ。

ん!?

「おいしいでしょ?」

おんぶちゃんが、くすくす笑てる。いや、ほんま
に、めっちゃうまいわ。

「このたこ焼き、なんでおいしいかわかる?」

「さあ」

タネも変わってへんみたいやっだし、焼き方も変
えてへんし、あとは あ。

「ふふふ。教えてあげない♡」

そっかあ。うん。たしかに元気、分けてもらたわ
おんぶちゃん、おおきにな。

それはそれとして、や。

「そない意地の悪いこと言っんやったら、あたしも
言ったらへん」

得意のたこ焼きで悩んでんの、あっさり解決しよっ
てからに。あたしにかけて、プライドあんなんで。

「あ、ずるい。またたこ焼きたべさせちゃうわよ。

さあ、白状しなさい!」

おんぶちゃんが両手に竹串持って、たこ焼き取っ
ちやああたしの口ねらって来てる。

「もう。いくつ食べたたら素直になれるのよ?」

『おおきに』なんて、何個食わされても、絶対言
わへんで!!

—おしまい—

あとがき

作品終了後半年以上が過ぎました。他の作品も楽しんではおるのですが、^{はなし} 噺にしたいな、と思うのはまだまだどれみです。

などと言いつつ、4ヶ月かかって2本しか書けないというのははい。単なる力不足です。愛が減ったわけではありません(多少、妙な方向に傾いている気もしますが)。

では、今回のネタにつきまして、ほんの少しだけコメントを。

- 『ぬくぬくめがね』
 - 名古屋にお出しました、矢田 はづ噺。ネタは割とあるのですが、小噺にしたのは初めてでした(“小間物”は1回あり)。
 - カッコいい矢田くん fan の方には申し訳ないのですが、私ははづきっちに^{ほんろう} 翻弄される矢田くんが好きなのです♡
- 『たこやきいくつ?』
 - え～、ついにやってしまいました。名前付きのオリジナルキャラ(咲ちゃん&田辺くん)です。友だちの名前呼ばないでいるのにも限界がありまして これでも出番は最小限に抑えましたので、どうぞご勘弁を_(_)_
 - 正直に言います。この噺がまとまったのは、『もらいものに笑顔』(竹本泉氏著:「よみきり♡もの5」に収録)を読んだ後です。もちろん、最初に浮かんだのは、たこ焼き食べさせてるところ(^_^;)

では最後に、この本を手にした(手にしてしまった方も含めて)すべての方に感謝の意を表しつつ、この拙文を終わらせていただきます。

この本に関するお問い合わせは、奥付の住所、または電子メールにてお願い致します。

e-mail nyankoh@sake.st

ハンドルは、“猫好. K” もしくは“金井亭 猫好”です。

また、細々とながら情報ページを作っております。

酒処金井亭 うえぶ店

<http://sake.st/nyankoh/>

お目に止まりましたら、よろしく願いいたします。

追記：私の書く文は、条件付きですがコピー可です。コピーしたいなんていう奇特な方は、以下の三つの条件を守っていただければ、いくらでもして頂いて構いません。

1. 表紙を含む、すべての頁をコピーすること。
2. 表表紙から裏表紙までを一セットとし、各頁を分離したり、新たな頁を加えたりしないこと。
3. コピーに際して必要な、最小限の費用を越える金銭授受を伴わないこと。